

### 「地域研究」拠点のより一層の発展を

西村成雄

内外の図書館や公文書館でいつも思うのは、図書をはじめとする資料取替と整理、公開利用の全過程に、関係者の方々のなみなみならぬ御尽力があるということです。とくにアジア経済研究所の図書館は、一利用者としてみると実に周到なる知の集積への情熱を背後に感じながら、ここにしかない文献をコピーしたり、筆写したりする醍醐味を何回も経験させていただいてきました。

日本での地域研究が本格化したのはやはり一九六〇年代からですが、歴史的には植民地政策学としての戦前からの蓄積が基盤になっていたと考えられます。当初、私の研究対象が中国近代東北地域にあつたことから、市ヶ谷時代から利用させていただき、当時在職されていた井村哲郎氏をはじめとする方々の精力的な戦前期資料の取替を真近かにみつ、その旧満洲関連の資料群から多くの成果を吸収させていただいていました。偶然でしたが、ワシントンの議会図書館でもお会いし、そのグローバルな史料取替のスタンスにも驚いたしだいでした。私個人も大阪の勤務先に近かつた大阪府立図書館夕陽丘分館は、元の大原社会問題研究所でその蔵書の一部を継承しており、戦前期の旧満洲関連の書物や雑誌をみる機会がありました。その同じ書物や雑誌をアジ研図書館でも発見し、さすがだと実感していました。

現在は、ここ五、六年海浜幕張に参つており、私にとっては新しい図書館での所蔵図書や

多種多様な新着雑誌などを手に取ることができるようになり、近年の研究にかかわる多くの文章はその恩恵を基盤に書いてきたものでした。たとえば、中国からの新着雑誌『開放時代』（廣州市社会科学学院）などは、系統的に読み解くことで私の現代中国認識の重要な源泉になっています。ほんの一例をあげますと、二〇一三年第二期の特集「世界歴史的中国時刻」(The Chinese Moment in World History) では、現代中国における研究者の歴史意識の所在を多面的に理解しうる読み応えのあるものでした。伝統の再造としての今後の中国文明のあり方を、儒家イデオロギーや自由の理念との関連でとらえなおし、「超サイズの共同体」としての中国はどのように「文明帝国」たりうるかという

「大國の復活」を議論し、それは欧米のキリスト教的文明への「対抗者」ではなく、またそれへの「順応」でもないとする、より高次のあり方を追求しているのだと強調しています。この思想的立ち位置は、あきらかに現代中国イデオロギーのなかで「新儒家」的傾向をもつものですが、如実に二一世紀段階の中国の自己認識のあり方のひとつを示しています。いささか「近代の超克論」的傾向が気になりますが、もちろん新着の欧米の中国関連の雑誌、書物からも多大の恩恵を受けていることはいまでもありません。それは日本の中国地域研究にとって、中間の「支点」再設定とならんで、第三の「支点」がますます重要な意味をもつことになる

思われます。本図書館にも関連文献が所蔵されていますが、あたかも一九三六年夏の太平洋問題調査会のヨセミテ会議で、経済的にも台頭しつつある国民政府をどう評価するかについての欧米の知見を吸収しえた尾崎秀実が、その後のグローバルななかでの中国再認識論を提起したのも、そうした新たな「支点」を獲得したからだともいえるでしょう（『中国統一化論争』の研究、『中国統一化』論争資料集）アジア経済研究所、一九七一年、山口博一氏、野沢豊氏ほか。今井清一・藤井昇三編『尾崎秀実の中国研究』一九八四年など）。

一九六〇年代後半期から市ヶ谷の図書館にお世話になって以来かなりの時間がたちましたが、海浜幕張の新しい図書館は日本における地域研究のみならず、アジアの／世界の地域研究にとって重要な拠点になっています。私の外国の友人たちもそのようにみえています。この存在感は、世界で／アジアで生きるこれからの日本のあり方を象徴しているとの思いがますます強くなっています。グローバルな地域研究の公共財として、研究所・図書館を基盤とする世界に開かれた新たな研究教育機関構想を具体化できないかとも思うしだいで。図書館をとうてい「使い倒す」ことなどできない、しかももう残された時間のない利用者としての願望です。

にしむら しげお／放送大学教授

研究領域は中国近現代政治史。ここ20年ほど「20世紀中国政治史」として1949年で大区分しないネーションステイト形成論とその矛盾を議論している。放送大学教材として佐々木智弘氏との共著『20世紀中国政治史研究』（2011年）、伊原澤周編『戦後東北接收交渉紀実』（中国人民大学出版社、2012年）所収論文など。